

World Englishes 志向・複言語主義の英語教育の意義

—日本人英語の因果関係描写スタイルを通じた考察

和泉 絵美 (京都外国語大学・京都大学 (非))

1 背景

1.1 新しい英語観: World Englishes

グローバル化が急速に展開する近年、英語母語話者 (NES: native English speakers) 対非英語母語話者 (NNES: non-native English speakers) という旧来の (または一部で現在まで続く) 二項対立的英語観に対抗する、World Englishes (WE) という新しい英語観が浸透し始めている。WEでは、各国内・間でコミュニケーションの補助として使用されるNNEを、「NEから逸脱するもの」としてではなく、NEも含めた英語の諸変種として捉える[1]。

1.2 新しい言語能力観: 複言語主義

WEに加え、複言語主義 (plurilingualism) が新しい言語能力観をもたらしつつある。複言語主義は欧州評議会による言語政策 CEFR (ヨーロッパ言語共通参照枠) で提唱されている概念で、ここでは個人の中には母国語を含めた複数の言語が対等に共存しており、人がその諸言語の間を双方向的に行き来することにより、より深い相互理解を伴う異言語・文化間コミュニケーションが実現するとされる[2]。

1.3 WE・複言語主義時代の日本の英語教育

NEを規範とする英語教育では、そこから逸脱する使い方は誤りとされるが、NNES 同士のコミュニケーションが大半を占めるWEの時代において、「良い英語」の基準が見直されつつある。また、複言語主義をとるCEFRでは、言語使用者がその言語を使ってできること (Can do) が評価基準として記述されており、形式的な正しさよりも、いかにその言語を使って意図した行動を取れるかが重視されている。日本の英語教育現場でも、CEFR やそれを日本の英語学習・使用の実情によりフィットするよう調整したCEFR-J[3]が導入され始めており、言語の機能性重視の方針へ転換しつつある。しかし、WE志向のアプローチには、WEの多様性・不定性と教育上示されるべき「規範」の間でどう折り合いをつけるかという問題がある。NEというわかりやすい規範が不在になった場合、どのような教育・学習目標を設定すべきなのだろうか。また、CEFR(-J)を日本の英語教育に導入しようとする際、異なる言語を話す人々の往来が活発な欧州で生まれた複言語主義を全く異なる地理・言語・文化的条件の日本で採用する意義や妥当性が、しばしば疑問視される。

2 目的と手法

このような背景を踏まえ、本研究では、次の2点を検証する。

- WE志向の英語教育における言語的規範とは何か
- 複言語主義に基づく英語教育を日本で行う意義は何か

一点目に関しては、日本語を母語とする学習者の英語 (以降JEと呼ぶ) の特徴をNESや他のNNESグループと対比しながら分

析し、結果をWE的視点で解釈する。そして、そのJEの特徴がWE志向の英語教育でどう扱われるべきか思索し、WE志向の英語教育における言語的規範とは何であるか検証する。二点目に関しては、一点目で検証されたWE志向の英語観と複言語主義に基づく言語能力観の関連性を探り、複言語主義が日本の英語教育でどう機能しうるか考察する。

3 WE志向の英語教育における言語的規範とは何か

3.1 JEの因果関係描写スタイルの分析

JEの特徴分析として、その因果関係の描写スタイルを、NEや他のNNESグループ (Kachru (1985)により定義された外円圏¹または拡大円圏²に属する国々[4]) の英語との対照を通して検証する。Pinker (2014) は、英語の因果関係の描写スタイルを「数学的に簡潔で美しい (mathematically elegant)」と表現する。書き手はまず原因を示し、次にそれが引き起こすイベントに言及する。その繰り返しにより行動の連鎖 (action chains) が展開し、物事の因果が描かれていく[5]。このような因果関係の描写形態を、SVO文型で明快な情報描写を行うという英語の原則を代表するスタイルの一つと捉え、今回の分析対象とした。具体的には、議論エッセイ内の因果関係の描写文に含まれる影響・作用の語義をもつ動詞の使用状況を分析した。

3.2 分析データとツール

分析では、ICNALE (International Corpus Network of Asian Learners English) [6]のうち、次の2トピックの議論エッセイデータ (200~300語/1エッセイ) を用いた。表1に、書き手グループごとのエッセイの件数と延べ語数を示す。

- It is important for college students to have a part-time job.
- Smoking should be completely banned at all the restaurants in the country.

表1. 書き手グループごとのエッセイの件数と延べ語数

	JPN	NES	外円圏	拡大円圏
エッセイ件数	800	400	1,400	3,000
延べ語数	201,540	97,583	340,758	705,852

分析では、CasualConc 2.0.7 [7]を用いてJEと他グループの対比を行い、特徴的に用いられている動詞リストを作成した³。そのうち影響・作用の動詞として使われうる語を手で選別し、最後に各動詞が使われている文脈を参照しながらJEの特徴を考察した。

¹ 本研究で対象とする外円圏の国: 香港・パキスタン・フィリピン・シンガポール

² 本研究で対象とする (日本以外の) 拡大円圏の国: 中国、インドネシア、韓国、タイ、台湾

³ 1,000語あたりの正規化頻度で対比した。

表2. JE と NE の対比における各グループの特徴語 (影響・作用を意味しうる動詞)

対数尤度	バイトエッセイ		喫煙エッセイ	
	JPN	NES	JPN	NES
≥ 15.13 ($p < .0001$)	-	provide(34), take(107), allow(40), balance(26), put(28), relate(20), apply(20), create(10)	separate(109), stop(123), divide(56), prohibit(89), decrease(72), forbid(41), relax(51)	allow(117), introduce(28), leave(28), let(21), kill(23), prove(19), designate(10), encourage(10)
≥ 10.83 ($p < .001$)	-	show(23), leave(20), drop(9), expand(12), help(88), worry(20), manage(25), keep(35)	annoy(34), ban(840)	tell(25), regulate(9), serve(12)
≥ 6.63 ($p < .01$)	realize(59), get(563)	engage(11), organize(7), prove(7), benefit(12), cut(10), improve(18), cover(6), pick(6), turn(6), afford(7), carry(8), place(8), encourage(9), stand(10)	make(361), damage(29), spoil(26), prevent(37), harm(78), solve(35)	issue(7), enforce(14), put(31), affect(38), blow(8), endanger(6), involve(6), force(17), lead(24), surprise(7), show(25), extend(8), provide(21)
≥ 3.84 ($p < .05$)	raise(12), solve(12)	expose(6), build(8), let(12), finish(11), serve(10), force(9), hire(8), support(21), interfere(6)	spread(18), influence(11)	push(5), run(9), send(7), offer(8), take(74), relate(12), expose(15), eliminate(5), end(5), link(5), pick(5), teach(5), apply(7), benefit(6), shorten(6)

表3. 他の NNES グループとの対比における JE の特徴語 (影響・作用を意味しうる動詞)

対数尤度	バイトエッセイ		喫煙エッセイ	
	対外円圏	対拡大円圏	対外円圏	対拡大円圏
≥ 15.13 ($p < .0001$)	get(563), tell(36), make(325), realize(59), contact(14), scold(11), grow(48)	start(85), neglect(27), scold(25), teach(99)	separate(109), make(361), divide(56), trouble(24), decrease(71), forbid(41), solve(35), injure(16), annoy(34), prohibit(89)	separate(109), divide(56), trouble(24), spoil(26), prohibit(89), ban(840), decrease(72)
≥ 10.83 ($p < .001$)	start(85)		begin(29), relax(51), ban(840)	worry(19), permit(19), irritate(13)
≥ 6.63 ($p < .01$)	prevent(12), raise(12)	realize(59), begin(28), contact(14)	stop(123), permit(19), bother(18), spoil(26), hurt(20)	remove(11)
≥ 3.84 ($p < .05$)	neglect(21)	tell(36), prevent(12), lead(23)	throw(15), worry(19), change(21), keep(54), harm(78)	injure(16), begin(29), bother(18), spread(18), prevent(37), satisfy(15), place(19)

3.3 結果

表2と表3に、他の母語グループとの対比を通じたJEの特徴語のうち、影響・作用の動詞として使われ得る語⁴、その対数尤頻度、素頻度(カッコ内の数値)をエッセイのトピック別に示す。表2はJEとNEを対比した場合の双方の特徴語リストである。バイトに関するエッセイでは、JEで4語、NEで39語が、喫煙に関するエッセイでは、JEで17語、NEで39語が特徴語として抽出された。JE-NE間で特徴語の数に大きな差があることが分かる。両トピックに共通の特徴語がいくつか存在する(JPNのsolve、NESのprovide、take、allow、encourage、exposeなど網掛け文字の語)ものの、トピックによってリストに含まれる語の内容が大きく異なっていた。また、JEでは、トピックによる特徴語数の差も顕著だった。したがって、トピックは書き手の語彙使用に大きな影響を与えるものであり、ここでの特徴とは、あくまでも特定のテキストにおけるものに過ぎず、各グループの普遍的な言語特徴とは言えないということを前提に検証を進める必要がある。他のNNESグループとの対比におけるJEの特徴語を示す表3にも、表2ほど

⁴表2と表3の頻度には、次の例外的なケースも含まれる。

- 多義語が、影響・作用以外の意味で使用されている。
- 能格動詞が、起動相自動詞として使用されている。
- (特にJEにおいて) 適さない文脈で使用されている。

ではないものの、トピックによる傾向の違いが見られた。

3.4 考察

表2と表3の特徴語が出現する文脈を参照しながら結果を考察したところ、JEの特徴として次の4点が示唆された。

- (1) JEはNEに比べて因果関係を被使役者(causee)視点で描写することが多い。

表2に挙げたJEのバイトエッセイにおける特徴語は、必ずしも影響・作用の動詞として使われているとは限らず、特にgetとrealizeはそれ以外の語義で使われていることがほとんどだった。表4に、JEのバイトエッセイの特徴語4つがどのような語義で使われていたかを使用例と共に示す。

これらの使用例においては、原因(causer=バイトすること)がもたらす効果・結果を説明する際、動詞の動作主は被使役者(=バイトする人やその人の資質)であり、述部でその被使役者がバイトによって得る効果や結果状態が描写されることが多い。つまり、JEでは被使役者視点で因果関係を説明する傾向があることが示唆される。一方NEでは、原因視点で因果関係が説明されることが多い。表2のNEの特徴語は、ほとんどが影響・作用の動詞として使用されており、原因(=バイトすること)を動作主とすることが多い(表5)。

表4. JE のバイトエッセイにおける特徴語の使われ方

特徴語	高頻度の語義と使われ方
get	(能力・利益などを) 得る <i>Through part-time job, we can get money and good experience.</i>
	句動詞の一部 <i>... we can experience many varieties of jobs by having a part-time job and we learn how to get along with our colleagues ...</i>
	(形容詞を伴って) なる <i>... it is not good that you work too hard, because you do not spend much time to study and you get sleepy during lecture.</i>
	(大事なこと等に) 気づく <i>... from my experience of part time job, I realize that my thought about job was so easy.</i>
raise	子を育てる <i>(by working part-time,) I could find a little how much trouble my parents earned money and raised me.</i>
	(能力・スキル等を) 上げる <i>(by working part-time,) you will be able to raise communication ability.</i>
solve	(problem を伴って) 解決する <i>Through working in communities, we can learn how to solve problems</i>

表5. NE のバイトエッセイにおける特徴語の使われ方

特徴語	高頻度の語義と使われ方
provide	もたらす、与える <i>Working through a variety of jobs provided me with skills that are important for life.</i>
expose	(人に) 触れさせる、経験させる <i>Part-time jobs often expose students to the greater population at large.</i>
cover	(費用を) 埋め合わせる <i>A part-time job is usually enough to cover any personal expenses.</i>
interfere	邪魔する <i>It (a part-time job) will interfere with their studying habits.</i>

(2) トピックによっては(1)の傾向が弱まることもある。

表2のJEの喫煙エッセイの特徴語が出現する文脈を参照すると、(1)の傾向が弱まっていることがわかる。原因(=喫煙)を動作主とする影響・作用の動詞として、damage, harm, annoy, separate, divide, spoil, prevent, influenceなどが使われていた。いくつかの使用例を表6に示す。

表6. JE の喫煙エッセイにおける特徴語の使われ方

特徴語	高頻度の語義と使われ方
damage	損なう、害をおよぼす <i>... smoking damages not only people who are smoking, but also people who are around cigarettes ...</i>
harm	害を与える <i>... smoke of cigarettes harm taste of foods.</i>
annoy	苛立たせる、困らせる <i>Smoking may annoy the other people in the restaurant.</i>

このようなトピックごとの傾向の変化については、書き手のトピックへの親密度や、トピックにおける立場の違いがその一因と推測される。ICNALEにおけるJEの書き手は日本の大学生であり、彼らの多くにとって「アルバイト」は「喫煙」よりも馴染みのあるトピックであろう。アルバイトから影響を受ける立場(被使役者)から当事者意識を持って説明した結果、被使役者視点での因果関係描写が目立つ結果となったのではないだろうか。すべての

書き手はトピックからの影響を免れないが、JEにはその傾向がNEよりも強く見られる。

(3) JEはNEに比べてcontrol verbの使用が少ない。

(1)で述べたJEとNEの視点の違いは互いに排他的ではなく、あくまでもJEとNEの対比における各グループの特徴に過ぎない。JEにもNEの特徴語リストにある語が出現するし、NESが被使役者視点で因果関係を説明することもある(例: *Others will benefit from the discipline and time-management skills. / Many of them drop out because they find that work is more important than school.*)。しかし、NEにおいて被使役者を動作主とする動詞を含む文脈を参照すると、その動詞が主動詞としてではなく、control verbを伴って使われるケースがあることがわかった(例: *A part-time job has allowed me to make many connections. / A part-time job may force a student to forgo a class. / It will certainly help improve their financial situation.*)。表2のNEの特徴語リストにallow, put, let, help, encourage, forceなどのcontrol verbになり得る動詞が含まれていることから、JEはNEに比べてcontrol verbの使用が少ないことが示唆される。

(4) JEの対外円圏の特徴語群の方が、対拡大円圏の特徴語群よりも対NEの特徴語群に近い。

表3は他のNNESグループの英語との対比におけるJEの特徴語リストであるが、そのうち、対NEにおけるJEの特徴語でもある語に波線が引かれている。それによると、対外円圏の特徴語リストと対NEのリストの共通語数は、バイトエッセイで3語、喫煙リストで13語である一方、対拡大円圏のリストと対NEのリストの共通語は両トピックでそれぞれ1語および8語であった。このことから、対外円圏におけるJEの特徴は対拡大円圏における特徴よりも、対NEにおけるそれに近いといえる。また、対NE、対外円圏、対拡大円圏のすべてに共通するJEの特徴語(バイトエッセイにおけるrealize、喫煙エッセイにおけるseparate, divide, decrease, prohibit, ban, spoil)は、少なくともそのトピックにおいてはJEの普遍的特徴語といえる。

3.5 JEの特徴はWE志向の英語教育での言語的規範となるか

NEを規範とする英語教育では、3.4で挙げたようなJEの特徴は、誤りとまでは解釈されないもののネイティブらしさ(nativeness)に欠けるとして使用を避けるべき対象となりうる。対するWE志向の英語教育でこのようなJEの特徴をどう扱うべきか考えるにあたり、非規範的な言語特徴を、国際的コミュニケーションで使用可能なEnglish as a lingua franca (ELF)の特性として認定する際の、①規則性がある、②異なるNNESグループの英語使用者によって頻繁かつ広範に使用される、③コミュニケーションにおいてきちんと機能する(意思疎通を阻まない)、という三条件[8]がヒントになる。

3.4で示したJEの因果関係描写スタイルに見られる特徴は、一つ目と二つ目の条件を満たしていると言える。ただし、これらはWEとは(一部共通するものの)異なる英語観であるELFとして認定する際の条件であるため、二つ目の条件の「異なるNNESグ

ループの英語使用者」という部分を「日本人英語使用者」に読み換える必要がある。そうすれば、3.4のJEの特徴は、この二つ目の条件も満たしていると解釈でき、コミュニケーションで使用して差し支えない(WEとしての)JEの特徴と認めることができる。

では、「ネイティブらしくないが広く使われていて意思疎通を阻まない英語」が、WE志向の英語教育における言語的規範なのだろうか？この点については、大きな疑問が残る。まず、ESP (English for Specific Purpose) のような明確な目的に特化した学習に限らず、一般的な英語の習得を目指す場合においても、モデルとなる英語使用者のイメージは、学習者によって異なる。つまり、どのような英語を規範とするかは学習者自身が決めることであり、教師側から「NEらしくないが意図するコミュニケーションを達成できる英語」を強制することには違和感を覚える。また、NEに比べて不定性の高いWE的用法が実際のコミュニケーションにおいて支障をきたすかどうかは、状況や文脈に大きく依存するため、教室でそのコミュニケーション上の機能や効果の度合いを測ることは、大抵の場合において困難である。また、このWE時代においても、依然として(特にフォーマルな領域での)書き言葉におけるWEの世界的受容度は、話し言葉に比べると格段に低いと考えられ、上記三条件を満たしているからといって、無批判にWE的表現を書き言葉に適用することには躊躇が残る。

このように、各学習者にとっての「良い英語」に高い多様性が、またWEに高い不定性があること鑑みると、教師側から特定のタイプの英語を「規範」として提示すること自体が、WE的英語観と矛盾するといえる。

4 日本の英語教育における複言語主義の意義

3.5の議論を踏まえると、WE志向の英語教育でまず重点を置くべきなのは、WE的英語を生成する能力ではなく、自国のグループも含めた異なるNNESグループによる諸英語を受容する能力なのではないかということが明らかになってくる。WEを介したコミュニケーションでは、WE的用法を使えるかどうかよりも、対話相手のWEを受け入れ、理解しようとする態度をもつことが重要である。WEの提唱者であるKachru(2008)は、異なるNNESグループの英語発音のバリエーションに関して、自分とは異なるグループの発音に慣れるには少し時間を要するが、そのようなバリエーションに触れる機会が増えるほど理解は容易になり、そのような違いを予測することにより、異種の英語を理解する態度が養われると説いている[1]。この考え方は、個人の中で複数の言語が対等に共存し、その諸言語の間を双方向的に行き来することにより異言語・異文化間でのより深い相互理解が実現するという複言語主義の言語能力観と重なる部分が多い。例えば日本での英語学習において、JEと他の母語グループの英語を学習者自身が対比し、グループ間の共通点・相違点を探ることは、他グループの諸英語への理解力を高めるだけでなく、WEとしてのJEを省みる機会ともなる。更に、相違点が生まれる原因として、各グループの母語からの影響を検証することにより、自国語への深い理解や他グル

ープの母語への関心へと繋がるかもしれない。これを、欧州のそれとはまた異なる「日本版複言語主義」と捉えれば、日本の英語教育に複言語主義を導入する意義が見出される。

5 最後に：本研究と言語処理の接点

WEや複言語主義のような新しい英語観・言語能力観に基づくこれからの日本の英語教育について、JEの特徴分析を起点に考察した。最後に、このような言語教育的視点と言語分析および言語処理との接点について、少し触れたい。4で述べたように、WE志向のコミュニケーションにおいては、生成能力以上に、異質なものを理解しようとする態度を含めた受容能力が重要となる。しかし、現時点での学習者コーパス研究の多くは、NEを基準とした生成能力向上へと応用されている。一方、英語学習のための言語処理分野では、聴解・読解補助のような受容能力向上への応用研究も多いが、そのほとんどがNEの理解を目指すものである。また、誤り訂正をはじめとする英作文支援や発音練習システムにおいても、多くの場合その規範はNEである。今後、これらの分野にWEや複言語主義的視点が導入されていくと、より時代に則した研究開発が実現すると考えられる。

謝辞

本研究は、JSPS 科学研究費補助金(課題番号16H01935、基盤研究(A)「英語到達指標CEFR-J 準拠のCAN-DO 指導タスクおよびテスト開発と公開」)の助成を得たものである。

参考文献

- [1] Kachru, Y. & Smith, L. E. (2008). *Cultures, Contexts, and World Englishes*, London, UK: Routledge.
- [2] Council of Europe (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- [3] 投野由紀夫(編)(2013).『英語到達指標CEFR-J ガイドブック』大修館書店.
- [4] Kachru, B. B. (1985). Standards, condification and sociolinguistic realism: The English language in the outer circle. In R. Quirk, & H.G. Widdowson (Eds.), *English in the World: Teaching and Learning the Language and Literatures*, Cambridge, UK: Cambridge University Press, pp. 11-30.
- [5] Pinker, S. (2014). *The Sense of Style: The Thinking Person's Guide to Writing in the 21st Century*, London, UK: Allen Lane, pp.165-166.
- [6] Ishikawa, S. (2013). The ICNALE and sophisticated contrastive interlanguage analysis of Asian Learners of English. In S. Ishikawa (Ed.), *Learner Corpus Studies in Asia and the World, 1*, Kobe, Japan: Kobe University.
- [7] Imao, Y. (2018). *CasualConc (Version 2.0.7)* [Computer Software]. Osaka, Japan: Osaka University.
<https://sites.google.com/site/casualconc/>
- [8] Cogo, A. & Dewey, M. (2012). *Analysing English as a Lingua Franca: A Corpus-driven Investigation*, London, UK: Continuum, p.102.